CASA連続市民講座

# 第15期 地球環境大学

# 脱！温暖化生活

## 第4回講座　遊び編「エコロジカルな遊び体験」

**とき：2007年8月11日（土）13:30～16:30**
**場所：甲山自然環境センター**

「脱温暖化生活」の4回目は「エコロジカルな遊び体験」をテーマに、いつもの会場（会議室）を抜け出し、緑豊かな兵庫県西宮市立甲山自然環境センターでの講座となりました。阪神西宮駅からバスに揺られて30分、右に左に急カーブする山道を登った先に、その自然環境センターがありました。

### ■エコガイドウオーク

まず、自然環境センター内の甲山森林公園へ移動し、約1時間エコガイドウォークを楽しみました。公園に向かう山道は、歩きやすいように整備されてはいるものの、木々や草花などの植物は自然のままの状態で、生き生きとした姿を間近に見ることができました。備長炭の材料になる樫（ウバメガシ）や樟脳の成分になるクスノキなど、エコガイドさんが次々と説明してくださり、参加者は木の幹に触れたり、葉を手にとってみたり匂いを確かめてみたりと、はしゃぎながら公園へと向かいました。**（写真）**

公園では「自然を感じるプログラム」として2つのゲームを行いました。①ひみつのことばさがしゲームと②自然のパレットゲームです。①ひみつのことばさがしゲームは、用意された公園内のさまざまな場所や植物の写真をヒントに、チームで協力して、1文字ずつ文字の書かれたシールを捜し出し、最終的に8文字の言葉を完成させるというものです。ヒントとなる写真は、撮影の角度が工夫されていたり、素材しか分からないように撮られるなどしており、参加者は広い公園内を走り回りながら、あるいはじっくり細かく観察しながら、1つ1つの文字を探しました。2つのチームが「しぜんといっしょ」というひみつのことばを完成させた後、②自然のパレットゲームを行いました。これは、画用紙に描かれた真っ白なパレットに、自然の色をのせて作品を作ってみようというものです。生きているものではなく、落ち葉や地面に落ちている実や枝などを使うことがルールでした。普段は同じような色にしか思えない落ち葉や枯れ草ですが、できあがった作品は本当に色とりどりで、ユニークなものが完成しました。

最後に、みんなで大の字になって、地球の音を聞き、大地の暖かさや風の動きを感じました。コンクリートの上では感じられない、なんとも言えない安らぎを得ることができました。

（入江智恵子 CASAボランティア）

今回体験したエコガイドウオークとは対照的に、今は都会の生活をそのまま持ち込んだようなオートキャンプ場での遊び、あるいは車で郊外のショッピングセンターへ出かけたりといった娯楽が一般的になっています。しかしこれらの娯楽は全ての面で「消費」をともなう過ごし方です。そこで私たちは屋外での自然体験のあと、自然環境センターの屋内に移動し「遊びと環境」とりわけ「子どものおもちゃと消費生活」について考えてみました。

## ■子供のおもちゃと消費生活

環境市民事務局長の堀孝弘さんより「子供のおもちゃと消費生活」というテーマで話をしていただきました。堀さん自身、実際の子育て経験から、子供の「おもちゃ」の購買サイクルの早さは、そのおもちゃとテレビアニメとの関係から生じており、新しいキャラクター玩具を売るために、アニメのストーリーが展開していくなど興味深い事実が紹介されました。（**写真**）

一方でおもちゃ屋さんは国によって大きな違いがあることがわかりました。日本のおもちゃ屋ではキャラクター玩具やゲーム機が大きな電子音を立てながら所狭しと動いているのに対し、ドイツのおもちゃ屋さんではキャラクター玩具はほとんどなく、家族が一緒に遊ぶボードゲームや大人まで使える鉄道模型など、子供から大人まで長く遊べるおもちゃが多く置かれており、静かな店内で自分の子どもに合ったおもちゃをじっくりと選べる環境があるそうです。

このように日本では子供が最初に出会う道具である「おもちゃ」自身が、情報源である「テレビアニメ」などによって日々新しく作り変えられていくため、使い捨てが身についてしまう危険性があります。それを防ぐためにも大人たちは、日々子供たちにどのような情報が送られてきているのかを気にかけ、見守っていく必要があるといえます。また外で遊ぶ場合でも、子供は自然の中に放っておけば遊べるものだと思っている人もいますが、今は外で遊べない（遊び方を知らない）子供も大勢いて、大人がまず遊びのきっかけを子供に与えることや、一緒になって楽しみを見つけることが必要になっています。つまり今は子どもの遊びに関して、昔よりも大人の役割が重要になってきているといえます。

## ■これからの子どもたちに（ワークショップ）

最後のワークショップでは、それぞれが幼い頃していた遊びを思い出し、どんな遊びが楽しかったのか、みんなで意見を出し合いました。そしてこれからの子供たちにはどんな遊びをしてほしいと願うか、また私たち大人がどのように子供たちの遊びに関わっていけるかのかについて考えました。

参加者からは「自然の中で遊んでいたころの楽しさを思い出した。」「自分が昔やっていた遊びの楽しさを自分の子供にも伝えたい。」「まずは親子の会話、つまり言葉によるコミュニケーション力をつけることが大切なのではないかと思う」など、最終バスの出発時間ぎりぎりまでいろいろな意見が出されました。

そして最後に「外に出てみんなで遊んだこと、参加者同士のいろんな意見が聞けたことがよかった。」「普段あまり考えることのないテーマがよかった。」などという感想が寄せられました。夏の暑い中の課外講座でしたが、参加者・スタッフが和気あいあいと交流する時間もあり、いつもとは一味違う体験や発見ができた講座だったと思いました。

（江川真理子 CASA ボランティア）